

## バックラッシュ・私の場合

女性政策研究家・東海大学北欧学科講師 三井 マリ子

「男性は小さいうちから男性の自覚を、女性も(女性としての)自覚を育てていくべき...オスとメス、男と女というのは有史からずっとあるわけですから」

大阪府豊中市議会議員のKさんは、2005年4月14日、毎日テレビの特集番組でこのようにいいました。女性は、子どもの頃から女性としての分に応じて生きるように育てなければならないと言いたいらしいのです。

私は、2004年3月まで、豊中市男女共同参画推進センター"すてっぷ"の館長でした。性別役割分業には大反対でした。そこでの事業として、社会的に作られた男らしさ女らしさを解消する方向の企画を打ち出すわけですから、K議員が容認するわけありません。2002年末ごろから、バックラッシュが始まりました。

2003年、男女共同参画推進条例案の上程がはっきりするると、それが顕著になりました。"すてっぷ"の窓口に、「市民だが」と称する人物が来て、「館長はいるか」「ここの主は誰だ」などと、大声をあげました。うち一人は、「教育再生地方議員百人と市民の会」の事務局と名乗る男性でした。教育現場に政治的に強引な介入をする運動体で、同会の理事長はさきほどのK議員です。

自称市民の男性は、"すてっぷ"で部屋の使用を断られると、豊中市役所に行って、「"すてっぷ"から『男女共同参画推進を損なうような活動には貸せない』女共同参画推進を損なうような活動には貸せない』と言われた。なんでや」などと要求します。

また彼が関わる「『男女共同参画社会』を考える豊中市民の会」と称する会が、市内でチラシをまきます。そこには「ジェンダーフリーは、フリーセックスを奨励し、性秩序を破壊することになります。そうすると結局、被害者は女性です……」などと妙な言葉を散りばめてあります。そして、彼らの勝手な定義による"ジェンダーフリー"の中心人物とされる私を、名指しで誹謗中傷します。

一方、市議会では、条例案に攻撃的な発言が相次ぎました。先鋒のK議員は、旧来の男らしさ・女らしさにこだわり、専業主婦の役割をことさら高く評価す

るように主張します。"すてっぷ"の受付窓口対応から事業内容まで槍玉にあげ、はては、こういいました。

「蔵書の中にある多数のジェンダーフリー関連の図書は、市民に誤解を生む原因になる。一方的な思想を植えつけるような図書は、"すてっぷ"をはじめ学校図書館などから即刻廃棄すべきである」。

以上は日本の限られた一地域の小競り合いだと思われるかもしれませんが、実は、N会議という巨大勢力の反男女平等運動の一断面なのです。

そもそもこの勢力は、女性差別撤廃条約の真髄である「性別役割分業の解消」に反対です。国の政策課題に男女平等の推進が掲げられたのが我慢ならないのです。男女共同参画社会基本法のもとで、自治体が同法の趣旨を徹底させるような条例も、男女平等社会構築のための拠点施設である"すてっぷ"のような施設の存在も許せないのです。その勢力は主として、議会で「議員の質問」という形をとり、社会に厳然と存在する男女不平等や女性蔑視を、「特性」の名のもとに覆い隠そうとします。

こうした男女平等つぶしの継続的動きは、バックラッシュ(逆流)と呼ばれます。アメリカの女性解放運動への組織的攻撃について著した『バックラッシュ』(スーザン・ファルデー、1991年)が世界的ベストセラーとなったことから、男女平等の流れに逆らう反動現象をこう呼ぶようになった、というのが定説です。

のが定説です。

さて、こうしたバックラッシュ攻撃に対処するにはどうしたらいいのでしょうか？

わたしたちが毅然と対抗する以外に方法はないと思います。その偏見や誤解や不当性を、議員や行政に文書にして届けること。事実を議員の選挙区の住民に伝えること。インターネットなどのメディアで全国の人と情報を共有すること。直接被害にあったなら私のように法廷に訴えるという方法もあります。

「かながわ女性会議」の目的は女性が力をつけ男女が対等に生きられる社会をつくりあげることだと思います。バックラッシュ攻撃と闘っている女性たちを支援していただけたらうれしいです。